

岸田松若について

三宅 克典¹

1. はじめに

創立 140 年を迎えようとする東京薬科大学は多数の卒業生を輩出しており、そのなかには科学史に名を刻むものも少なくない。著名な人物は成書や展示により活字化されているが、一方で情報を得ることが難しい人物も見受けられる。

2019 年 6 月の東京薬科大学薬用植物園公開講座において、第 50 回という節目であることから本薬用植物園の歴史に関する講演を行うこととし、東京薬科大学薬用植物園の歴史とその周辺情報を調べた。当初、岸田松若については断片的な情報しかなく、生い立ちなどを知るのは困難であったが、調査の過程で画家岸田劉生との繋がりに気づき、多くの有益な情報を得ることができた。しかし、情報は断片的であり集約されていないため、後に同様の興味を示す方への道しるべになればと思い、得た情報についてここに纏めることにする。なお、調査不足により不正確な記載や漏れがある可能性があるが、その場合は著者にお知らせ願いたい。



岸田松若の肖像

2. 岸田松若の略歴

明治 21 年（1888 年）生まれ。大正 2 年（1913 年）春、東京薬学校（東京薬科大学の前身）卒業（旧 48 回卒）。東京薬学専門学校（東京薬科大学の前身）の教員を務める傍ら、日本各地で植物調査を行った。また、学内で東台植物研究会を設立し会長を務めた。植物学者中井猛之進博士に植物を提供し、新種の命名の際に献名されている。大和本草の考証本や、内務省に依頼されて全国の薬用資源について調査した『薬用植物調査概要』でも知られる。昭和 19 年（1944 年）2 月 19 日没。

3. 岸田家

岸田松若の父、岸田吟香（1833-1905）は、東京日日新聞主筆を務めた一方で、精錡水本舗楽善堂経営という実業家の両方の顔を持ち、清国との交流を積極的に行った。また、新聞に広告を初めて出したことでも知られる。当時にしては晩婚であったにも関わらず、妻の勝子との間に七男七女をもうけた。

岸田吟香の七男七女の子供の中で、抜群の知名度を誇るのは画家の劉生（1891-1929）である。娘の麗子を題材にした多数の麗子像が特によく知られている。岸田松若に関する情報収集と同時期に、没後 90 年記念岸田劉生展が開催され、その資料を得ることができたことは著者にとって幸運であっ

¹薬学部薬用植物園

た。今では耳にすることの多い響きの劉生という名前だが、当時は非常に珍しい名前であり、号と思われることもしばしばあった。麗子は『父 岸田劉生』の中で「劉は卯年に因み、卯は金気の上に坐し、刀を傍えにして邪気を断ち、一般大生を守る」という意味があるそうで、祖父は卯年に生れて来る我が子にこの字を選んで、下に「生」をつけて名として出かけていったのだ。」と記している。吟香の命名は、各分野への造詣の深さを思わせるエピソードである。あいにく、松若の由来に関する記載を見つけることはできなかった。

他のきょうだいの中では五男の辰彌（1892-1944）が有名である。オペラ歌手として活躍した後、宝塚歌劇団の演出家となり、大衆演芸レビューの大作「モン・パリ」を作り上げた。宝塚に通称ロケットと呼ばれるラインダンスをもたらしたとも言われている。また、三女の駒（1882-1908）は「漢学に通じ、和歌も堪能であった」とあり、大成はしなかったものの才能に恵まれていたようすが見て取れる。これらは、吟香の教育方針と家庭環境のたまものだと考えられ、劉生に「松若兄さんは痩せた神経質な人であった。体も弱く、小さい時から植物が好きだった。」と表現された松若が植物で頭角を現すことになるのは容易に想像がつく。

松若の家庭や人となりについての記載は限定されている。「吟香ゆずりの跳ね上った眉毛の下の大きな目を輝やかして、たのしそうに話し、声を上げて笑っていた姿が目のにこっている。いつか父達に連れられて、銀座の本家に寄った時のことだった。ふだんはどちらかといえば無愛想な人で、私はほとんど言葉らしい言葉をかけられた覚えもない。」と麗子が回想して綴ったものは貴重な記録である。一方で、「一時胸を患って、鶴沼の父のそばで療養生活を送ったこともあったが、病弱のため一生外出もあまりしなかった様子で、私はめったに会ったことはなかった。」という記載は一部正確ではないと考えられる。採集者が岸田松若名義で作製されたさく葉標本のラベル情報を集約してみたところ、関東近郊を中心に日本各地で頻繁に採集されているのが見て取れることから、「病弱のため一生外出もあまりしなかった」というのは考えにくい。

4. 岸田松若と岸田劉生

松若と劉生は歳の近い兄弟ということもあり、一緒に過ごす時間も長かったようである。麗子の著書には、「品川の青物横丁（今でも停留場がある）の、品川の方から行って一つ手前を西に入り、田んぼ道を歩いて行くと、妙華園という高級ものをあつかう花屋があった。温室があり、ヘリオトロップ、バイオレット、フリージア、ばら、などの花がいつも見事に咲いていた。松若兄さんはそこへよく父を連れていったものだった。」と記されている。妙華園とは、ポトマック川に植栽された桜の苗木を選定したことで知られる河瀬春太郎が、妙光寺（東京都品川区）に隣接した一万坪もの土地に構えた植物園のことであり、品川用水の豊富な水を生かしたスイレンなどの水生植物の展示や、最先端の園芸技術や温室を駆使して当時珍しかったバラやランなどの西洋植物の栽培・展示が行われていた。当時は向島百花園をしのぐ名所であったが、周辺の工業化に伴い大正10年に閉園し、敷地を鉄道省に売却したとされており、跡地は現在のJR東日本東京総合車両センターであると考えられる。

著者が松若と劉生の関係に気づいたのは、『劉生若年彩描』の照子髪梳き図、大根河岸、ならびに仕立て屋の善さんという作品に松若が解説をつけていることを知ったことによる。その後、劉生に

ついて調べる過程で、前述の麗子の著作中にある「松若兄さんは薬学専門学校（現東京薬科大学）を出て、学校の薬草園を管理しながら学校で教鞭をとっていた。」という記載を見つけ、確信に至った。

劉生が転地療法で移住した鶴沼（現神奈川県藤沢市）でつけていた日記（鶴沼日記）には少ないながらも兄弟の関係が垣間見える。1920年5月16日の日記には「同便に光子さんから便りあり、松若兄が病気がよくない由、腎臓炎を發し、床に就いたき兩便とも便器に取つて居るとか、事によるとなほるかどうかわからぬ様子の由、秦に聞く。読むにたへず。（中略）すぐ松若兄を訪ねようとしたが、時間が遅いので止める。出来る丈の事をしてあげたい…」とある。この年の4月に吟香の次男の艾生が病死しており、兄弟を失うことの恐怖が垣間見える。当時、松若は大久保百人町に居を構えていたが、劉生は翌日午後に松若のもとを見舞っている。

標本のデータを解析すると、松若は少なくとも3回は鶴沼を訪れたことになっている。1回目は1918年5月で、この前年に劉生が転地療法のため鶴沼に引っ越したところであるゆえ、様子を見に行っただのではないかと推察する。2回目は1920年5月であるが、前述のとおり松若は大病を患っていたため調査を行えたかどうか疑問である。また、17日の劉生の日記には「なつかしく話しする」とあり、5月16日の病気以前に鶴沼を訪れたとも考えにくい。加えて、標本の最終日が不明となっていることから、これは劉生が松若を見舞った際に手土産として持参したものを標本にした可能性が高い。なお、標本にされたのはゴマで、インド・中東原産で自生はないため植栽されたものである。松若の標本の多くは野生の植物のもので植栽された植物のものはほとんどないことも、劉生から贈られたとの考えを支持している。

5. 岸田松若の大学での活動

岸田松若は、1913年東京薬学校（東京薬科大学の前身）卒業し、東京薬学専門学校（東京薬科大学の前身）の教員を務め薬草園の管理を行う傍ら、日本各地で植物調査を行った。学内では東台植物研究会の会長を務め、学生の植物の知識習得の手助けをした。同窓会誌の東薬会報第5号（昭和2年）に会についての記事がある。

東臺植物研究会々報

會員約廿名を擁し、植物學界の權威岸田松若先生を載く我會は本年五月に産聲を揚げたばかりであるが、元氣潑瀾たる會員諸子は既に七回の採集をなし驚くべき實績を擧げて居る、（後略）

東京薬科大学には植物研究部という大学公認の部活動がある。植物研究部は日本各地で精力的に植物調査を行い、数多くのさく葉標本を残した。狭山丘陵周辺の植物調査の結果をまとめて1967年に著した『狭山丘陵の植物』は学生主導の調査としては秀逸である。昭和20年代に発行された部報には、植物研究部第24回の学年が昭和17年（1942年）9月卒業とあり、逆算すると初期の活動時期が東台植物研究会と連続している。植物研究部の前身は岸田松若が会長を務めた東台植物研究会であったと考えるのが自然であろう。

東台植物研究会が発行していた会誌の第4号（昭和4年8月）には、岸田松若の以下の寄稿がある。

- 遠志とヒメハギ
- ハシリドコロは萇若に非ず
- アヂサイ。土常山並びに常山の説
- ゲンノショウコの学名
- シナノスミレ
- ベニタイゲキの一産地

同誌内には植物採集記録の項があり、第19回から第22回について記されている。

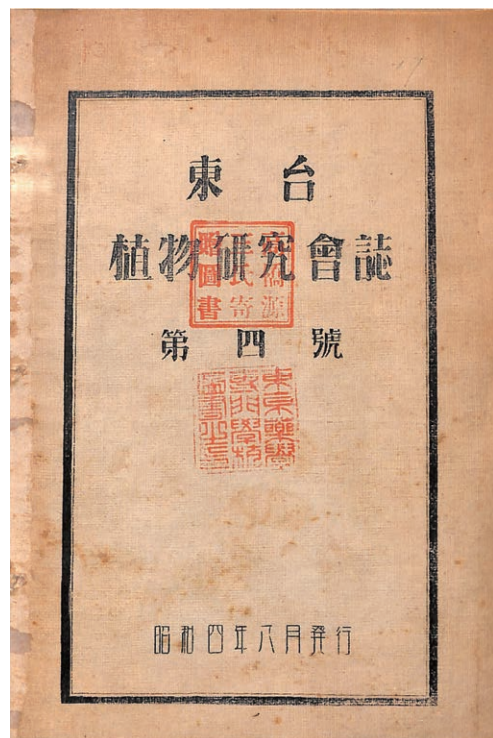
第19回 埼玉県地方（昭和4年4月3日）

第20回 東京府下高尾山（昭和4年4月14日）

第21回 東京府石神井（昭和4年4月29日）

第22回 千葉県茂原（昭和4年5月12日）

それぞれの回ごとに参加者、行程、採集植物の記載があり、多くの学生を引き連れて採集を行っていたことが記録されている。



東台植物研究会誌第4号表紙

6. 岸田松若の業績

岸田松若は日本各地で植物採集を行い、1万点以上のさく葉標本を残した。その一部は東京大学教授、国立科学博物館長を務めた中井猛之進博士に提供され、新種の記載の証拠となった。3分類群の学名の命名の際には中井博士により献名をされている。

- キシダマムシグサ（ムロウマムシグサ）（『植物学雑誌』31巻，372号，284頁，1917年）

Arisaema kishidae Makino ex Nakai

- ナエバキスミレ（『植物学雑誌』36巻，426号，69頁，1922年）

Viola kishidae Nakai（論文中は *Viola Kishidai* Nakai）

（現在は *Viola brevistipulata* (Franch. et Sav.) W.Becker var. *kishidae*

(Nakai) F.Maek. et T.Hashim. を充てることが多い）

- ハクバブシ（『植物学雑誌』63巻，741号，56頁，1950年）

Aconitum kishidae Nakai

（現在は *Aconitum zigzag* H.Lév. et Vaniot subsp. *kishidae* (Nakai)

Kadota を充てることが多い）

多くの植物を採集した岸田松若であるが、標本データを解析すると、同日に離れた2か所以上で採集された標本の記録が多数みられる。別の人物から植物の提供を受けて標本を作製していた可能性があることを記しておく。



ナエバキスミレ

中井博士への植物提供以外にも、大正7年には、内務省衛生局（現在の厚生労働省）の依頼により、日本各地の民間で使用される薬用植物の情報について記した薬用植物調査概要を編纂した。また、貝原益軒の著した大和本草のうち、第2冊の考証に携わった。加えて、採集記録、植物形態による比較、植物材料の提供などで、次に示す論文を執筆している。ただし、可能な限り検索したが、すべてを網羅しているとは言い難いことを付け加えておく。

岸田松若が『植物研究雑誌』に投稿した論文一覧

- 岸田松若：艸樂談片（其一）
1巻9号 225-228頁 1917年
- 岸田松若：艸樂談片（其一）（承前）
1巻10号 253-255頁 1918年
- 岸田松若，松野マサ子：トウビャクブ *Stemona ovata* Nakai 及び二三ビャクブ属に就て（其一）
9巻5号 315-324頁 1933年
- 岸田松若，松野マサ子：トウビャクブ *Stemona ovata* Nakai 及び二三ビャクブ属に就て（其二）
（ビャクブ *Stemona japonica* Miquel 及びタチビャクブ *Stemona sessilifolia* Miquel）
9巻6号 381-389頁 1933年
- 岸田松若，松野マサ子：トウビャクブ *Stemona ovata* Nakai. 及び二三ビャクブ属に就て（其三）
（タマビャクブ *Stemona tuberosa*）
9巻8号 529-535頁 1933年
- 岸田松若：コハクサンボクを熱海に採る
10巻1号 50-51頁 1934年
- 岸田松若：真鶴岬のナギラン
10巻2号 118-119頁 1934年
- 岸田松若，松野マサ子：トウビャクブ及び二三ビャクブ属に就て（其四）
10巻5号 296-299頁 1934年

岸田松若が『野草』に寄稿した論文一覧

（野草：檜山庫三らによって設立された野外植物研究会の会報）

- ヒトツバジフモンジシダ
2巻11号 1936年
- 草木覚えがき（その一）
3巻5号 1937年
- 草木覚えがき（その二）
3巻8号 1937年
- 草木覚えがき（其三）
3巻10号 1937年

その他の論文

- 柴田桂太, 岸田松若: 植物ニ於ケル「フラヴォン」誘導体ノ一般的存在及其生理的意義 (第二報) 高山植物ノ生態ニ就テ
植物学雑誌 29 卷 347 号 301-308 頁 1915 年, 29 卷 348 号 316-332 頁, 1915 年

7. おわりに

薬用植物園公開講座の資料のため、岸田松若について調査することになったが、本稿執筆時点で没後 75 年が経過しており、伝聞による情報の継承はもはや期待できず、数少ない活字化された資料に情報を求めるしかなかった。せめてあと 30 年早ければ、生前のことを知る人から情報を得ることができたであろうと悔やまれる。本学の数々の偉人について、情報を集約し記録する必要があると感じる。貴重な資料・情報をご提供くださった、本学薬用植物園、指田豊名誉園長、ならびに、資料・情報の収集にご協力下さった本学史料館、小曾戸洋博士、葛西哲也氏に感謝申し上げます。

8. 参考文献

- 山田諭 監修, 『没後 90 年記念岸田劉生展公式図録』, 2019 年.
- 東珠樹, 『岸田劉生』, 1978 年.
- 東珠樹, 『岸田劉生とその周辺』, 1974 年.
- 上田慶之助 解説, 『劉生若年彩描』, 1980 年.
- 『大崎今昔物語 大崎・このまちの ルーツを訪ねて その 3』 (2019 年 12 月 25 日閲覧)
[<http://www.ohsaki-area.or.jp/townguide/konjyaku/img/konjyaku03.pdf>]
- 米倉浩司・梶田忠 (2003-) 「BG Plants 和名ー学名インデックス」 (YList), [<http://ylist.info>]
(2020 年 1 月 14 日閲覧)